形成外科

部長　杉田　直哉

診療体制

形成外科は、河瀬弘代医師が当院での後期研修を継続しており、本年も赤松順部長（形成外科学会領域指導医・皮膚腫瘍外科指導専門医・小児形成外科指導医・創傷外科専門医・日本創傷外科学会評議員・日本褥瘡学会評議委員・褥瘡認定士)、杉田直哉部長（形成外科学会領域指導医・小児形成外科指導医・創傷外科専門医・皮膚腫瘍外科指導専門医)、河瀬弘代医師の形成外科 3 人体制が維持されました。

診療実績

新型コロナウイルス感染症の影響のもと、年間の新患者数は 319 名、入院患者数は 174 名と昨年度に引き続き減少した一年でした。手術件数は、入院手術 328 例と減少、外来手術 176 例と増加傾向でしたが、一昨年以前の水準には達しませんでした（表１)。また、麻酔法別内訳は、外来手術では腰麻・伝達麻酔 0 例、局所麻酔 176 例で、入院手術では全身麻酔 225 例、腰麻・硬麻・伝達麻酔 70 例、局麻手術 33 例で、全身麻酔症例の減少、伝達麻酔手術の増加が目立ちました。2017 度より、症例登録が NCD に移行し、報告様式に変更がありました。形成外科疾患データベースより形成外科専門医認定施設要件と過去 6 年間の件数推移を示します（表 2)。前年度に比して、I.外傷（熱傷・凍傷・化学損傷・電撃傷の手術症例、顔面軟部組織損傷、顔面骨折、頭部・頸部・体幹の外傷、上肢の外傷、下肢の外傷、外傷後の組織欠損（2 次再建)）は 10%減、II.先天異常（唇裂・口蓋裂、頭蓋・顎・顔面の先天異常、頸部の先天異常、四肢の先天異常、体幹（その他）の先天異常）は 66%増、III.腫瘍（良性腫瘍（レーザー治療を除く)、悪性腫瘍、腫瘍の続発症、腫瘍切除後の組織欠損（一次再建)、腫瘍切除後の組織欠損（二次再建)）IV.瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド、VI.炎症・変性疾患（蜂窩織炎、眼瞼下垂、陥入爪、腋臭症など)、VIII.その他（性同一性障害、ブラッドアクセス、分類不能など）はほぼ変わらず、2021 年に 15%増加していた V.難治性潰瘍（褥瘡、その他の潰瘍）は 4%減少しました。8 項目中 7 項目の分野の症例があり、規定の 5 項目以上の要件を充足しました。また、8 項目中 9 件以下が、当院では基本的に扱っていない VII.美容（手術）の 1 項目のほか、II.先天異常（唇裂・口蓋裂、頭蓋・顎・顔面の先天異常、頸部の先天異常、四肢の先天異常、体幹（その他）の先天異常）15 件、IV.瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド 8 件で、規定の 3 項目以内の要件を充足致しました。学会、論文発表など学術面での基準も、後述の如く充足致しました。

表１　年次別入院患者総数と手術件数（過去 6 年間）

	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年
入院手術	304	301	321	330	307	328
外来手術	207	291	291	183	212	176
合計係数	407.5	446.5	466.5	421.5	413	504
入院患者総数	190	190	193	173	163	174

表 2　年次別手術件数の症例内訳　（過去 6 年間）

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
I.　外傷 （全身管理を要する非手術例は含まず）	156	152	198	146	121	110
II.　先天異常	8	12	11	7	3	5
III.　腫瘍	134	169	158	123	128	125
IV.　瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド	14	24	22	7	7	8
V.　難治性潰瘍	120	125	157	180	215	206
VI.　炎症・変性疾患	26	22	25	23	15	16
VII.　美容（手術）	0	0	0	0	0	0
VIII.　その他	34	47	21	14	27	26
Extra.　レーザー治療	19	41	20	13	3	8
大分類　計	511	592	612	513	519	504

当科の特徴

近森病院は急性期特定病院、地域医療支援病院、管理型臨床研修病院、災害支援病院など急性期地域密着型の医療を行っている。形成外科はその中で顔面四肢の外傷や熱傷の治療はもちろん幅広く形成外科診療を行っている。当院の特徴、地域性により、最近は創傷外科分野における治療ニーズが上昇しており、急性期創傷のみならず、基礎疾患を持った慢性期創傷や皮膚・軟部組織悪性腫瘍の増加が顕著である。瘢痕・瘢痕拘縮の治療や創傷治癒に関する高い専門性を生かし、当院の特徴であるチーム医療及び垣根の低い他科との連携を通じて、医師として当然求められる知識、技術、倫理観などを持った一般外科救急臨床医としての資質を持った形成外科医の育成にも力を入れている。今年度も複数名の初期臨床研修医の指導を担当致しました。学外臨床実習も、新型コロナウイルス感染症の影響はありましたが、複数の大学から受け入れをしました。さらに、高知県消防学校救急科へ講師派遣、特定看護行為研修における創傷管理関係を担当し、実習などを行っています。

例年、学会発表などで、積極的に学術的情報発信を行っています。本年度も、新型コロナウイルス感染症の影響で web 発表ではありましたが、学会発表や教育講演などを行いました。

形成外科外来

外来センター4 階北側の形成外科 5 診 6 診で主に診察処置、7 診でミニカンファ・患者指導、8 診処置室でQスイッチアレクサンドライトレーザーによる色素性疾患、外傷性刺青の治療、CO_2 レーザーによる皮膚剥削、腫瘍切除など蒸散治療、ラジオ波による焼灼治療、陥入爪手術（簡単）などの小手術を行っています。また皮膚排泄ケア認定看護師との連携も密に行っています。

臨床研究課題

慢性動脈閉塞症の潰瘍治療に対して、厚生労働省より条件及び期限付で保険収載されたコラテジェン®（遺伝子治療用製品で、再生医療等製品に区分）に関して、当院は、高度な集学的連携可能な施設としてコラテジェン®による遺伝子治療を許可されています。当科受診時、重症化している患者様が多く、早期受診が重要と考えられます。

難治性皮膚潰瘍に対する新しい治療として、再生医療である PRP（多血小板血漿）処置が令和 2 年に保険適用となりました。当院は PRP 処置の条件である施設基準に適合しており、第 3 種再生医療等提供計画の事前届出を行い、治療開始できるように準備を進めております。

日本創傷外科学会で募集された趾切断に関する多施設間研究にも申請をしております。

学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
褥瘡治療におけるDACC添加セルロースアセテート創傷被覆材の利用	近森病院　形成外科 赤松順、杉田直哉 近森病院　看護部 安松和美、西村剛 近森オルソリハビリテーション病院　看護部 西森公美 近森病院　薬剤部 尾崎正和	第 22 回日本褥瘡学会中国四国地方会学術集会	3 月 6 日 徳島
SORBACT®コンプレス使用症例における菌種による微生物結合性の違いについて	近森病院　形成外科 赤松順、杉田直哉、河瀬弘代	第 14 回日本創傷外科学会総会・学術集会	7 月 14 日・15 日 神戸
左手タコ咬傷の 1 例	近森病院　形成外科 河瀬弘代、赤松順、杉田直哉	第 35 回高知県形成外科医会	7 月 30 日 高知
胼胝を伴った足底潰瘍における SORBACT®COMPRESS の効果について	近森病院　形成外科 赤松順、杉田直哉、河瀬弘代	第 35 回高知県形成外科医会	7 月 30 日 高知
CABG 後の難治性リンパ漏に対する局所陰圧閉鎖療法の治療経験	近持病院　形成外科 河瀬弘代、赤松順、杉田直哉、北村龍彦	第 75 回高知年医師会学会	8 月 20 日 高知
鼠径ヘルニアの術後に発生したデスモイド型線維腫の 1 例	近森病院　形成外科 河瀬弘代、赤松順、杉田直哉、北村龍彦 大阪医科薬科大学　形成外科 上田晃一	第 81 回中国・四国形成外科学会	9 月 4 日 WEB
当院で行っている TMA の手術手技	近森病院　形成外科 杉田　直哉	第 11 回高知皮膚・軟部組織欠損治療研究会	11 月 24 日 高知

講演

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
DACC 創傷被覆斉 機序と臨床的所見	近森病院　形成外科 赤松　順	第 14 回日本創傷外科学会総会・学術集会 ランチョンセミナー	7 月 15 日 神戸

論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	巻・号 ページ
こんなマニュアルが欲しかった！ 形成外科基本マニュアル［1］ 2022 年 10 月 15 日発行	赤松　順・杉田　直哉 近森病院　形成外科	PEPAERS 全日本病院出版会	No.190 63-71 2022
異所性蒙古斑内に発生した Bednar 腫瘍の一手術例	木村祐介*・赤松　順*・杉田直哉*・上田晃一** *近森病院　形成外科 **大阪医科薬科大学医学部形成外科学講座	日本形成外科学会誌	Vol.42 138-144 2022